

わたしの中のたくさんの文化

みなさん、約30年前、ベトナム戦争後の政変で多くの難民が生まれたことをご存じですか？
今回、みみタロウは、難民として来日し、現在、大津で小児科・アレルギー科の医院をされておられる渡部玉蘭先生にお話を伺いました。



両親は中国広東省の海南島からベトナムに移り住み、私はベトナム南部のサイゴンのチヨロンというチャイナタウンに生まれ育ちました。国籍はベトナムでしたが、自分は中国人だと親から言われ、

中国文化の中で育ち、心の故郷は住んだこともない中国なんです。小学校ではベトナム語と中国語でバイリンガル教育を受けました。1975年、サイゴンが陥落してベトナムは共産国となりましたが、中国との関係が悪化したため、私たちの財産は没収され、ベトナムから逃げ出すしかありませんでした。15歳の時、私は兄弟と共に混乱の中、ベトナムを脱出。ホートビーブルとして海を漂流した後、香港へ逃れ、難民キャンプで過ごした後、二人の兄たちが留学していた日本へとやってきました。日本では地元の中学校の校長先生の裁量で中学校の聴講生として編入させてもらい、先生にも友達にもとても暖かく迎えられる。最初は言葉がわからずもちろん大変でしたが、落ち着いて勉強ができるだけでも幸せで、一刻も早く日本語を覚えたい気持ちでいっぱいでした。学校では友達に日本語にふりがなを振ってもらい勉強。家に帰るとテレビが第二の先生で、耳を大きくしてニュースを聞いていました。高校は生涯で一番勉強した時期です。そして、人に役立つ、外国人でも資格を取れる仕事に就きたいと医者を目指し、難民医学生第1号となりました。医者は本当にやりがいのある仕事だと思っています。

医療に関して言えば、それぞれの国には固有の医療文化がありますが、現在、世界中で西洋医学が普及しており、文化の相違というより、時代の流れや経済状況によって受けられる医療の差の方が大きくなっています。例えば、香港では出産は、帝王切開が流行ってい

た時期もあると聞きますが、赤ちゃんが産道を通る時に肺に溜まっている水分を絞り出すプロセスが重要であることがわかって、やはりできれば自然出産がいいと考えられるようになっていきます。

また、基本的に医師は専門外の病氣以外ほどの患者も診る義務があります。ところが言葉が全く通じないと、診察が成立しないので、外国人の場合、自分のことをよく知ってくれているかかりつけ医を持つことをお勧めします。そして、医療についてだけでなく、日本で生活するならば、日常生活に困らない程度の日本語を身に付けることが大切です。新しい言語の習得が難しい面もありますし、話せない人は、たれかに頼めば言葉が通じるというルートを持っておくと良いでしょう。

外国人が日本に溶け込むには、言葉の壁がひとつありますが、それを乗り越え、一旦溶け込んでしまおうととても楽で心地良く暮らせます。華僑は世界中どこでも生活できる場所に根をおろし、国の保護のない状態で生きています。私もこれまで国籍などあまり意識したことがなく、今ではすっかり日本人と同じように暮らしています。

でも、おもしろいことに、未だに数字の計算は小学校の頃に習った中国語で行います。夢をみるとときや高等学校の勉強を考える時は日本語で、アメリカ人の顔を見ると自然と英語を話すという様に、身につけた時の言葉が出てくるんです。自分の中に様々な文化が存在して今の自分ができているように、それら全てが自分であるから、だから国籍だけにこだわっても仕方ないんです。そして、今の自分があるのはこれまでの自分があったからで自分のどの時期も否定することはありません。あれから30年、本を読むのも日本語が一番早くなり、いつの間にか日本が私の第一の故郷になっているのかもしれないですね。

医者として外国籍の方々にも少しでもお役に立てれば嬉しいです。子どもさんだけでなく、大人の方も診察してますよ。